



Title	文学研究と文学批評 : Enrique Anderson Imbertの『現代文学批評』
Author(s)	大井, 浩二
Citation	大阪外国語大学学報. 1963, 14, p. 125-136
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80230
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

文学研究と文学批評

—Enrique Anderson Imbertの『現代文学批評』—

大 井 浩 二

On Anderson Imbert's *La Crítica Literaria Contemporánea*

Koji Oi

In this essay, the writer has introduced Professor Anderson Imbert's book, *La Crítica Literaria Contemporánea* (Buenos Aires, 1957), with the translation of its Chapter I, "Disciplinas que estudian la literatura." A review of the book is to be found in *Comparative Literature* (Summer 1959), pp. 268—70.

学問における批評の重要性を強調した書物といえば、すぐに思い当たるのがWellek & Warren 共著の *Theory of Literature* (1949) である。しかし、この重要な研究書はあまりにも高度で、初歩の者には十分に消化しきれない恨みが残るように思われる。もっと簡単に批評のあり方を解説した本はないかと考えていた矢先、Enrique Anderson Imbertの書 *La Crítica Literaria Contemporánea* (Buenos Aires, 1957. 194pp.) に出会った。この書についての簡単な紹介は *Comparative Literature*, XI (No.3, Summer 1959) に出ているから、それについて見られたい。スペイン語で書かれ、また学生用の参考書であるという制限は受けているものの、われわれ外国人に対して示唆するところは極めて大きいように思われる。

著者Anderson Imbertは1910年 Argentina の生れ。1946年まではTucumánの国立大学で文学教授を勤め、その後、合衆国においてMichigan, Princeton, Harvardなどで研究、現在ではBuenos Airesの国立大学でイベロ・アメリカ文学の教授をしている。すでに数冊の評論、研究書を出版してその広い視野はかなり高く評価されているようである。ここで紹介する書物の特徴は、批評を一つの独立したdisciplineと考えていることで、欧米諸国においては当然のことといいながら、ラテン・アメリカにおいては、進歩的な見解とみなされるものである。その意味で、批評無用論の横行するわが国においても、この書の説くところは十分に通用するものではないかと思われる。

ここに訳出したのは、原著の第一章“Disciplinas que estudian la literatura”であるが、このあとに「批評に関する覚え書」、「批評研究法」などの章がつづいて、最も重要な章は「批評方法の分類」で全体の半分近く

を占める。最後にクローチエのダンテ論を理想的な批評として論ずる章がある。これに附録として、ラテン・アメリカにおける批評の現状を論ずる一章があり、書誌は二種あって、一つは一般的なもの、いま一つはラテン・アメリカの批評に関する書物のリストである。

註は原著につけられているものの他、（補註）として、訳者の思いついた書名をあげておいたが、Wellek & Warren本の詳しい書誌を参照すれば便利であるだろう。また、訳者がスペイン語を専攻する者でないゆえに、思いがけない誤解があるかとも恐れるが、原著者の言わんとするところは充分汲みとれるものと信じる。ここに訳出できなかった残余の諸章、とくに第四章の“Clasificación de los métodos de la crítica”（批評方法の分類）は、またの機会に訳してみたいと考えている。

文学批評の定義を下すのが、ここでの目的である。そのために、まず、文学批評とその他の文学研究の諸分野とを区別してかかるのが好都合であるだろう。が、その区別を明白にするまえに、次の三項目を前提としておかねばならない。

- (a) 文学研究の諸分野は、すべて相互に補い合うものであって、互いに境界を接している。
- (b) 文学現象の理解は個々の研究成果に依存している故に、それ自体で他にまさっているというような研究分野はあり得ない。
- (c) 諸種の研究分野を明確にする場合に、われわれのとり視点は常に批評の視点である。換言すれば、文学研究を目指すあらゆる角度の中から、特定の角度である文学批評のみを選び出して、これに他のすべての分野を従属させるということである。このように、批評に最大のウェイトをかけるために、他の研究分野は、いかに優秀な成果をあげていても、結局は二次的な位置を占めることになる。この反対に、われわれの関心が文学批評以外の研究分野の解明にむけられる場合には、批評はやはり二次的なものとなってくる。従って、ここでの問題は、研究分野の個々の客観的な解説ではなく、批評が、他の分野との関連において、いかにそれらの分野を受けとめるか、ということになってくる。

こうした文学批評の立場から、われわれは文学研究の分野を、A. 文学を道具とみる研究分野（功利的研究）、B. 文学を問題とみる研究分野（哲学的研究）、C. 文学を社会生活の一部とみる研究分野（文化的研究）、D. 文学を価値とみる研究分野（本来の意味での批評的研究）の四つに分類することができるであろう。

A. 功利的研究

この種の研究においては、文学は自然科学や精神科学のための材料を提供するという貧弱な役

割しか担うことができない。この方法は文学にきわめて表面的に接するにすぎないのであって、文学を道具のごとく利用し、単に資料集めのためにのみ活用している。究極的には、文学でない何かを知ることが目的となっている。文学作品の価値は興味の外にあって、芸術作品がなにか他の目的に役立たない場合には存在価値がないかのごとくに考えている。地質学者、植物学者、動物学者、民族学者、経済学者、思想史家、宗教家、道学者、言語学者、心理学者などは、いずれも例証、データ、図表、さらには装飾さえをも収集するために、文学の海に網を投げこむのである。

が、しかし、これらの人々が文学そのものを研究していないことは言うまでもないことであって、文学をきわめて低く評価しているのである。たとえば、音楽史家アドルフォ・サラサル（Adolfo Salazar）は、その論文「セルヴァンテスの作品における音楽、楽器、およびダンス」において、『ドン・キホーテ』を研究しているのでも評価しているのでもない。⁽¹⁾動物学者ホルヘ・W・アバロス（Jorge W. Abalos）は「*Don Segundo Sombra* における動物」なる論文を発表しているが、⁽²⁾その本領は動物学であって、リカルド・ギラルデス（Ricardo Güiraldes）の小説ではない。哲学者ギュスタヴ・E・ミュラー（Gustav E. Mueller）はホーマーからドストエフスキーに及ぶ作品を渉猟して、人間の概念の変遷に関する資料を用いている。⁽³⁾社会学者アーノスト・コーン・ブラムステッド（Ernst Kohn-Bramstedt）は、十九世紀の小説を重要な情報提供源の一つとして利用することにより、ドイツにおける貴族階級と中産階級の状態を再構成している。⁽⁴⁾精神病患者の治療面への利用という目的をもって、詩を読むことも可能ではないかと考える学者さえいる。⁽⁵⁾この種の例は限りなく列举することが出来ようし、また、これに類する労作は、実際のところ、文学には無縁の研究として斥けることも出来よう。が、この方法の信奉者がしばしば文学研究家の中に見出される現状は無視できないし、文学作品に描かれている事実のみしか研究していないにも拘らず、文学を研究していると錯覚している人々の数は相当に多いことも事実である。オルテガ・イ・ガセット（José Ortega y Gasset）がペレス・デ・アヤラ（Pérez de Ayala）のある作品を読んでいた際、思いがけなくも、かつて彼のポケットから数ペセータの金をかすめ取ったスリの正体を明らかにする場面に出食わしたという挿話が残っている。リアリスティックな小説において群衆にまぎれこんでいる泥棒を引きずり出すことが批評的認識であると言うのではない。小説にちりばめられたヒントから、実在人物の人相書で作りあげることが批評の特権であるかのごとくに考える風潮があまりに強すぎることを指摘したいのである。この意味で最も極端な文学研究の方向は、文学作品に描かれている現実が科学的に真実であるか否か、つまり、作品の美的価値ではなく、真実の価値を証明しようとする批評の方向である。⁽⁶⁾

勿論、文学と文学ならざるものとの相互浸透は不断に行われていて、この結果、上述のごとき調査研究がますます増加する傾向があるとしても、決して不思議ではない。ウォルター・スコットの歴史小説とシアリー（Thierry）の近代史との相関関係、ドストエフスキーの心理小説とフロイドの精神分析との相関関係、ジュール・ヴェルヌの科学小説と探検や発明の業績との相関関係などが焦点をあてられることになってくる。が、しかし、前者は文学の研究であり、後者は文学ならざるものの研究であって、このことは、後者が根柢においては文学的理解を前提としているにしても、正しいのである。文学に対する科学者の好奇心が、科学に対する文学者の好奇心を刺激することを示す例を挙げておこう。数学者、哲学者である A.N. ホワイトヘッドは、その著『科学と近代世界』（*Science and the Modern World*, 1925）の中で、批評家が詩人のもつ科学的思考を見逃してきたことを嘆いて、「もしシェレーが百年後に生れていたとすれば、二十世紀は化学者たちの中のニュートンともいうべき人物を得たことであろう」⁽⁷⁾と述べている。マジョリー・ニコルソン（Marjorie Nicolson）は、この科学と文学との関係を調整することを旨とする考えにきわめて強い感動を覚えている。⁽⁸⁾

しかし、賢者の散歩などというものが、個々の作品の前に立ちどまって、かくれた美を明るみに出すまで追求をつづけるごときものでないならば、果して批評にとってどのような重要性をもつというのであろうか。いや、作品のまえに立ちどまるとしても、それに背をむけているのでは充分とはいえない。いわゆる書誌を一見すれば、文学そのものに関する研究ではなく、文学から抽出される科学的資料に関する研究の可能性を示す題目が何百とあることが瞭然となるであろう。「近代文学における貨幣、道德、流行」とか、「詩人とニュートン」、「ロマンティック抒情詩の精神病理学」、「ドイツ詩人における直観像」とか枚挙にいとまがない。これらの研究はすべて有用ではある。しかし、これらは無能力をカバーするための便法として文学作品を利用しているのにすぎない。貨幣の本質に詳しい経済学者ならば、「バルザックの小説における貨幣」の研究に没頭することも可能であるにしても、この種の仕事は思想史か風俗史の研究に属するものである。反対に、貨幣の本質をわきまえない文学研究家は、経済学にも文学にも深入りできないまま、この研究テーマの周辺を堂々めぐりすることになるのがオチであるだろう。

文学研究の諸分野を調べようとするいま、一つの決定的な相異点に注意しておく必要があるように思われる。ここで「功利的研究」の呼ぶ方法においては、文学は科学の召使である。しかし、本来の文学研究においては、歴史学、心理学、言語学、教育学などの諸科学そのものが召使の役割をもっていて、目をあげてその主人たる文学の芸術的な輝きにみちた顔を眺め見るのがせいぜいである。この相異を忘れてはならない。

B. 哲学的研究

文学の理論は、美学とともに哲学への思考をこらす。われわれはある特定の作品についての判断を下すのではなく、熟慮のすえに芸術的言語、文学の性質、美的表現の分類、原理、形式、機能などの諸問題を同時に解明しようと試みる。理論づけのために、文学の哲学のみならず、文学の科学までもが思いつかれるに至ったのである。クローチェ、ベルグソン、マリタン、ハイデッガー、サンタヤナ、オルテガ・イ・ガセットのごとく、その体系を文学的考察によって完成した哲学者がいる一方、サルトル、アントニオ・マチャード (Antonio Machard)、ティボーデのごとく、哲学的な指向をもつ文学者がいる。⁽⁹⁾ かくのごとく、多種多様な方法による文学の哲学が数限りなく存在する。そのあるものは、「文学の科学」 (Ciencias de la Literatura) という不適当な名称をもっている。⁽¹⁰⁾ ジャン・イティエール (Jean Hytier) は、文学への知識を向上することを目的とするすべての文化科学、哲学を歓迎してはいるけれども、なににもまして一つの「特殊な美理論」の形成が必要であることを指摘している。⁽¹¹⁾ 同時にまた、文学知識に関する特殊な認識論の形成を要求せねばならない。

C. 文化的研究

文学は文化的な生活の一部として、異った分野に属する専門家にとって共通の焦点となる。この専門家たちは、正しい意味での文学批評とは反対の方向に働いて、文学の美的価値よりもその素材により大きな愛著を示している。

1. 歴史と文学

歴史は人間の過去の再現である。この過去は個々の人間の経験を表現する書物から構成されるゆえに、文学史なるものが存在することになる。文学史は、何世紀にもわたる文学の形成にあずかって力のあった事実に対する解釈である。文学史によって、たとえば、セルヴァンテスがガルドス (Galdós) の先輩であったこと、ガルドスがこの先輩の影響を受けていること、セルヴァンテスとガルドスの業績とか、彼らに与えられるべき位置などが明らかにされる。が、しかし、セルヴァンテスとガルドスとが、いかにしてその作品の中に美的価値を形成しているかは、文学史によっては明らかにされないのである。文学史は、あたかも全ての文学作品が連続的に、数珠つなぎとなったままに生産されるかの感を与える。この単純な作品の行列の中にあるのは、たゆみなく生産される材料しかない。そして、全ての作品を一つの全体に数珠つなぎするために、文学史家は読者に首飾りを提供してはいらぬものの、首飾りの真珠そのものよりも、それをつなぐ糸のほうを尊重している。現象の総体に興味を覚えているのである。

文学史家は、世代、時代、流派、民族などの動向から、文学を眺めようとする。言い換え

ば、個々の作品のもつ特異性に目をくれずに、恣意的な図式にだけ焦点をあてようとするのである。作家の活動には目を閉じて、時代の動きに注意する一方、適切な表現を与えるために、独力で多くの困難にうちかった人間の精神の進歩ではなく、歴史という空間に張られた一本の線としての人間の進歩を結論づけようとする。多くの場合、文学史家は進歩をサイクルの形で表現する。種々雑多の作家たちが同一の材料を蒐集して、それに満足すべき形を与えるプロセスを観察するのであるけれども、その作家たちが新鮮味を失って反覆するだけになると、彼らに一つの時期を与えて区切りをつけるのである。この進歩のサイクルに言及する際、文学史家はしばしば「デカダンスと反動」、「春と冬」、「青年期、成熟期、老年期」などの比喩的表現を用いる。ときには、この進歩を存在しない法則で説明したり（例えば、解決されることのない「浪漫主義と古典主義」の法則）、形而上的であるがゆえに文学とは無縁な概念で説明したり（例えば、「国家の観念」、「世紀の精神」、「スペイン国民性」、「地球」、「人種」など）、あるいは、詩人の内面性の作用とは直接関係のないカテゴリーで説明しようとする（例えば、本質的には比較にならない時代と人間との対比）。

文学史家は、その深い思索にもかかわらず、客観性、没個性を目指す。みずからの知識で実証し得ない付帯事項、たとえば、個人的な趣味などというわずらわしい付帯事項は、すべて追放しようとするのである。一切を説明し尽くそうという気がかりから、事実、それも作品の内的な創造とは切りはなされた事実のまゝにキバを抜かれてしまっている。そして、その事実を、得られた結果の価値とは不釣り合いになるまでに限りなく集積するのである。文学史が事実の歴史であるにしても、「詩」をつかみとることからはほど遠い。厳密に言って、文学史に資料を提供する文学作品は、詩のない文学であり、思想、信念、道德的・愛国的動機、實際的行動、雄弁な演説の文句、革新的な風刺などを提供する文学である。いずれの場合にも、文学史は、歴史の流れをつなぎ合わせるために、詩的な作品を除外している。美的な価値がぬけ出していることは疑うべくもない。作家や作品の時間的・空間的な位置づけにとらわれているために、作家や作品の価値が無視されているのである。

要するに、文学史は読者に歴史を示すものであっても、その歴史の旅人を示すことはない。この歴史の旅路は天才にも二流作家にも等しく開けているのである。文学史のバックボーンが傑作であることは言うまでもない。しかし、歴史家は、その性格上、文学作品がいかに傑作であるかの判断を下し得ないことに注意せねばならない。文学史家は既に与えられた判断を鵜呑みしているにすぎないし、そのような判断は、過去の産物であるがゆえに、それ自体は歴史の材料になり得るのである。文学史家は、かなりの数の読者によって、かなりの期間にわたって受け入れ

られてきたものが、すなわち文学であると語っているように思われる。しかし、選択の基準は、人々の意見の一致、社会の記憶、いいかえれば歴史の中にその土台を置いているのである。

2. 社会と文学

歴史が社会の歴史であることに疑いはない。しかし、社会的事実は新しい知的な秩序に従わせることも可能である。この事実を調整するかわりに——それは歴史家の仕事である——多様な個人が相互に作用し合う時にたえず発生する社会的活動の諸形態を抽象化すれば、ここに新しい科学、つまり社会学が存在する理由が生ずるのである。社会学は、社会的関係の純粋な形態を、空間における共存、あるいは時間における連続という形で研究する学問であって、歴史学と同一の領域において現われはするものの、異った目的をもっている。反覆して現われる形態を発見することを目的としているのである。一般的な歴史の中に文学史が存在するのと同じく、一般社会学の中に文学の社会学が成立する。文学の社会学と文学史とは、同一領域に属するにもかかわらず、異ったものであり、社会学の興味をひくのは、直接間接に文学生活に干渉するあらゆる個人間の相互作用の指標である。従って、文学そのものではなく、文学生活がその最終目標となってくる。

社会学の仕事は、文学の周辺をとりまいていて、その径路は数多く、また交叉している：⁽¹²⁾

- (a) 特定の社会において文学の占める地位——作家の特権。一般大衆に対する作家の地位。文学と他の芸術との関係。芸術の保護・育成と作家に対する保護の形態。作家の生計。etc.
- (b) 文学の消費——階級、職業、性別、年齢による読者の習癖。文盲の多い社会における少数読者。趣味と流行。独自の目的をもって文学を脅かす大衆的な娯楽機関（映画、テレビ、ラジオ、絵入り物語の類）の勢力。それぞれの顧客をもつ商業演劇、実験劇場、私設劇場。社会の発展に大きな影響力をもつ書物。etc.
- (c) 文学生活の構造——文学グループの経営。編集者、図書館、出版社と作家との関係。批評と定期刊行物の広告宣伝。アカデミー、文学の読者、ジャーナリズム、大学など、文学活動に干渉する諸機関。etc.
- (d) 文学生活に及ぼす若干の影響——国家、教会、政党、経済組織などの圧力。文学に対して技術的、経済的、政治的かつ宗教的な変化を及ぼす諸問題。一般的な雑誌にふさわしい文学上の技巧（例えば、連載小説における物語の進展）や作家がもっている読者像に合致する文学上の技巧。etc.
- (e) 文学の社会的機能——作家の政治的活動。作家の反映する社会的テーマ（愛、犯罪、コンフォリズムなど）。創作における会話、法規、習慣の及ぼす影響。改革の意図。etc.

3. 言語と文学

文学作品を批評するための第一要件は、その作品の書かれている言語を熟知することである。それ故に、言語の性質を明らかにすることを目的とする言語学が行うすべての調査研究は、文学の研究に力をかすことになる。従って、言語学者は、本来の意味での批評家ではないにしても、批評の仕事を助ける優れた技術者である。とりわけ、フォスレル（Vossler）以後の伝統に従って、言語と言を文化史、精神活動、シンボルの生命力にみちた創造と考える言語学者の場合に、そのことが通用するのである。

現代の言語学者は、いくつかの間道を利用することによって、文学批評がその他の方法でもって行う仕事の領域に接近している。⁽¹³⁾ そのいくつかの例をあげてみよう。作家の社会的言語への貢献の評価（個人的な創造の美的価値は評価しない）。文学的な流派のもつ様式ほどに流動性に富まないにしても、文体的な特性をもつところの国民性にもとづく表現、構想力、情緒、意味などの様式に関する一般的な表現の調査。一国の言語の原形とその国の文学の内部形式との間にある依存関係の探求。言語史において、話者が、個人的な革新と伝統的な秩序との矛盾をもちながら、若干の形式に関する特権をもっていた時代の認定。記号の組織における構造上安定した現象についての観察。言語と思考とがからみあう内的形式の考察。etc.

言語学と美学との境界はきわめてあいまいであるけれども、言語学は自律的な科学であって、かりに文学の領域に入りこむことがあっても、それは外側からの侵入である。言語学は伝統的な活動の形式にのみ専念しているので、文学批評とはなり得ない。

4. 教育と文学

教育学は、いかにして文学を教えるか（例えば、読み方とか書き方）とか、いかにして文学を一般教養に組み入れるか、という問題に関心をもっている。文学を批評するのではなく、文学を定義し応用することによって、文学活動を保ち、伝達し、増大する方法を指し示す働きをする。あらかじめ用意されたプランに従って、生徒が文学の諸要素を理解できるように文学を分解するのである。機械的な仕事であって、創造的な仕事とはいえない。偉大な文学作品の教訓的で権威のある標準的リストや各作品の梗概、辞書や文学辞典などについて教えるのが、その仕事であり、さらに、たとえばアンソロジーの中で、美についての肯定的な批評を採用するのが常道となっている。比較し難く思われる二つの現象をとりあげ、類似や対比によって、生徒の注意力を重要な作品の内容に集中させることもある。分類することを目的とする結果、作品を寸断することになんの心配も感じない。文学教育においては、批評的価値のない分類、たとえば、いわゆる「詞姿」（figure of speech）、韻律、連、ジャンルなどの分類が、実際的な機能を果しているの

である。

5. 学問的研究⁽¹⁴⁾

文学研究の全分野は、学問的研究の詳細な仕事の恩恵を受けている。

学問的研究は断片的な資料を提供する。微にいり細にわたる知識である。その領域は広大で、ほとんど全てのことがこれに関係をもっている。学問的研究においては、事実が収集され、分類されるけれども、その判断は行われない。ある作家の生涯やある時代における客観的状況の解説。材源の究明。合作における各作家の担当部分の判別。異本の照合。事実の確認。匿名作家の正体暴露。文献表の作成。言語学的断片の判読。原稿から印刷に至るかくれた過程の追求。作者確定の問題の解決。資料の収集。剽窃の摘発。古文書や暗号文書の解読。統計やグラフの作成。作者に関係のない書きこみの指摘。複数テキストの決定版校訂。これらが学問的な仕事であるが、科学によってもたらされる知識を利用するので、その方法が科学的性格をもつことはたしかである。

この学問的研究による辛抱強い探求をめきにしては、批評家は確信をもって発言することが不可能である。

資料の単なる集積だけでは、歴史や批評の解釈的な力をもつことはできない。しかし、学問的研究は、それ自体、補助的な力をもつことができる。学者が熱心に仕事をして、われわれがその恩恵によって自由に通行できる道を謙虚に清掃してくれるとき、学問的研究はわれわれの尊敬に価する。しかし、その整理カードや伝記、文献目録、年代表、異本のリストなどを遠慮深く発表しないで、それらを厚顔しても、論文の形で水増ししたり包装したりするとき、もはや学問的研究はわれわれの尊敬に価しないのである。

D. 批評的研究

「批評」という語は、ある一つの現実を判断する意志を意味している⁽¹⁵⁾。人間は、ある対象に関して肯定したり否定したりする場合、多くの事例を認知、調査、収集して一つの態度を取り、一つの判断を下す。批評的思考とは、個々の主張の根拠を十分に方法論的に考察したあとで、考察した現実に独自の性質に従って判断を整理する思考である。これまでに述べて来た研究方法は、すべて文学を客観的に調査するという点で、批評的であるといえるけれども、「文学批評」なる用語は、文学的表現の過程にあらわれるすべての組織的な理解にのみ適用されるのである。

この文学作品の創造過程にあらわれるすべてという点を強調しておかねばならない。何故なら、理論や歴史学、社会学、言語学、教育学、学問的研究は、たしかに、批評的であるけれども、文学作品の部分にのみ焦点をあわせるだけであって、その美的価値は一切除外しているから

である。また、批評が果さねばならぬ特殊な使命は、作品の美的価値をその実現のあらゆる面において正しく評価することである。他の研究方法は、それぞれの方法に従って、「この文学作品は何であるか」という質問に答えようとする。ところが、文学批評は、それ自体の方法で同一の質問に答えようとすると同時に、「この文学作品にはいかなる価値があるか」という質問にも答えようとするのである。

言葉をかえていえば、歴史学や社会学、言語学、学問的研究は、それぞれが数多くの橋で連結されていて、その結果、一つの研究分野に入っていくためには、どうしても他の研究分野を通りぬけねばならぬ、という性質をもっている。従って、研究領域の畑の間に衝突がみられ、研究者は近くの畑に入るために通行税を支払わねばならない。学問的研究は歴史学に力をかし、社会学は言語学に、理論的研究は教育学に力をかす。批評もまた、これらの研究分野を通 過 す る 際 に は、その各々の分野の財布になにがしかの金を喜捨せねばならない。しかし、ただ一つ歴然としていることは、これらの研究分野が、同じように頻繁に批評をおとずれることがない、ということである。

批評は、その兄弟分の研究が親密感を示さないとはいえ、いささかの動揺を覚える こと も な い。その反対に、他の分野と異っていることを自慢することさえできるのである。他のすべての研究法は、文学の批評的な知識を標榜しているものの、決してその本来の意味において文学批評とはなり得ないことを知っている。すべての方法が一致団結しても、なおかつ文学批評を与えることはできないのである。ジャン・アンキス (Jean Hankiss) の信じる⁽¹⁶⁾ところでは、「文学の科学」は関連するすべての研究分野の同盟である。しかし、批評は、一般的な科学の中であって、きわめて不可欠な機能を果しているものであって、全体の同盟から結果するものではない。すべての研究分野は、文学を道具として、問題として、また一般文化の部分として研究するけれども、価値判断には触れることなく、これを放置している。批評以外に、この問題に四ツに取り組むことのできるものはない。文学批評はある作品が文学であるか否かを判断する。作品の文学的長所を判断し、その価値のハイレアキーを判定するのである。

批評がわれわれに伝えねばならぬことは、ごく短い言葉に表わし得る「これは価値があり、あれは価値がない」ということである。もし、このことを言うために、龐大な書物が書かれたとすれば、それは批評がその方法を追求し、開陳し、説明しているからに他ならない。そのために、文学という枝にのみり得るすべての研究調査の果実が集積されているからに他ならないのである。にもかかわらず、批評家が口にすべき「これは価値があり、あれは価値がない」というわずかな言葉は、何物にも代用され得ないということを忘れてはならない。

註

1. Adolfo Salazar, "Música, instrumentos y danzas en las obras de Cervantes," *Nueva Revista de Filología Hispánica*, Mexico, II (No. 1, January-March, 1948) 及び IV (No. 4, October-December, 1949).
2. Jorge W. Abalos, "La fauna en *Don Segundo Sombra*," *La Nación*, Buenos Aires, June 29, 1947.
3. Gustav E. Mueller, *Philosophy of Literature*, New York, 1948. (補註) これと同種のもとして, Leo Lowenthal, *Literature and the Image of Man* (Boston, 1957) をあげることができる。これはその副題の示す通り, 1600—1900年のヨーロッパ文学に関する社会学的考察であって, 文学者の抱えた人間のイメージの変遷をたどった研究である。
4. Ernst Kohn-Bramstedt, *Aristocracy and the Middle-classes in Germany. Social Types in German Literature; 1830-1900*, London, 1937.
5. Lucie Guillet, *La poéticothérapie, Efficacités du fluide poétique*, Paris, 1946.
6. Scholom J. Kahn は 作品と作家の経験との関係(表現の源泉), 作品内部において作品に意味を与えている文化的コンテクストとの関係(コミュニケーションの形式), 及び作品と科学的知識の組織内に構成された現実との関係(「模倣」の目的)を分析して, はじめて本当の対応関係が発見できると考えている。彼の論文 "What does a critic analyze? On a phenomenological approach to Literature," *Philosophy and Phenomenological Research*, U. of Buffalo, VIII pp. 237—245 (September 1952—June 1953).
7. (補註) 上田泰治, 村上至孝共訳『科学と近代世界』(創元社, 昭和29年), 125頁。
8. Milton, Swift その他における望遠鏡や顕微鏡の影響については, その論文集 *Science and Imagination*, Ithaca, New York, 1956を見よ。
9. スペイン語に限ってみると, Unamuno, Ortega y Gasset, Antonio Machado, Amado Alonso, Dámaso Alonso, Alfonso Reyes, Jorge Luis Borges, Eduardo González Lanuza, Octavio Paz などの批評理論のパノラマが示されることは, 興味深い。
10. Michel Dragomirescou, *La Science de la Littérature*, 4 vols., Paris, 1928—29; Guy Michaud, *Introduction à la Science de la Littérature*, Instambul, 1950; Herbert Cysarz, *Literaturgeschichte als Geisteswissenschaft*, Halle, 1926.
11. Jean Hytier, *Les arts de Littérature*, Paris, 1945.
12. (補註) 文学の社会学的な研究については, 最近の書物として, Robert Escarpit, *Sociologie de la littérature*, Paris, 1958; Leo Lowenthal, *Literature, Popular Culture, and Society*, New Jersey, 1961, pp. 141—161をあげることができる。また, この方面の文献については, Hugh Dalziel Duncan, *Language and Literature in Society*, N.Y., 1953, General Bibliography, pp. 143—214に詳しい。

13. (補註) たとえば, Winifred Nowottny, *The Language Poets Use*, New York, 1962, pp. 19—20の叙述, およびそこに挙げられている書物を参照。
14. (補註) Wellek & Warren, *Theory of Literature*, London, 1949, Ch.VI. “The Ordering and Establishing of Evidence” は, この問題をはるかに詳しく扱っている。
15. ギリシャ語の *krités* は *judge* の意。
16. Jean Hankiss, *Défense et illustration de la Littérature*, Paris, 1936.